



(医)潤心会理事長(岩手県)

鈴木千枝子 ④

## 歯医者が嫌いだった

私は「歯医者が大嫌いだった。昭和31年生まれ、父母は洋装店を経営し忙しかったので、学校から帰ると20円のおやつ代をもらって駄菓子屋に走る毎日だった。

薬のにおいがする場所だった。診療室と待合室はついたて一枚で区切られているだけで、順番を待っているとき「キーン、キーン」という恐ろしい音と共に、歯が焦げるにおいまで漂ってきた。院長はおじいさんの先生で、立った姿勢のままエンジンで歯をガリガリ削る。今思い出して

も背筋が寒くなるような光景だった。そんな子供時代を送った私がひよんなことから歯科医師になった。その最大の理由は、自分のような不幸な子供を助けたいと思ったからで、すぐさま小児歯科医を目指した。

しかし実際は、奨学金の返済と何より無給は困るという親の意向で、盛岡の歯科医院に就職。いろいろな事情で一年後に分院長になり、その半年後には分院を買収取って開業医になってしまった。27歳だった。開業した昭和58年当時は、むしろ歯を持つ子が90%を超えていた時代(平成25年12歳児のむし歯の者の割合は44.6%)。私のような未熟者でも患者さんは来てくれて、削ってつめて、抜いて被せての繰り返しを毎日黙々とやっていた。子供が泣いて暴ればレストレーナーにくくり付けて、ガンガン治療していた。

「これでいいのか?私をやっているのは、あのおじいさん先生と同じなんじゃないか」……。時々湧き上がってくるそんな思いを封じ込めながら、開業時の借金返済のため、生活のために働いた。気がつくと開業から15年たっていた。ちょっと生活も楽になってきた時に、倉治ななえ先生の「子育て歯科」に出会い、歯科医師観が変わったのだ。